鬼上司の執着愛に
とろけそうです

クラリス
Clarice

Eternity
BUNKO

目次

鬼上司の執着愛にとろけそうです　5
鬼上司と部下の後日談　191
書き下ろし番外編
オレンジの太陽　317

鬼上司の執着愛にとろけそうです

第一章

白鳳情報システム株式会社、本社十一階にある営業部オフィス。

その広いフロアの一角にある資料キャビネットの前で、私、三谷結衣は立ち尽くしていた。頭の中は真っ白だ。同期入社である秋本沙梨が、円らな瞳を潤ませながら言葉を続ける。

「……だからね……今澤チーフと私、付き合うことになったの……」

人事部の沙梨が必要だという営業部の資料探しを手伝っていた最中のことだった。私は半ば呆然としたまま、取り出した資料を差し出す。沙梨はそれを受け取り、話を続けた。

「ごめんね？　結衣がずっと、今澤さんのこと好きだったの、知ってたのに……」

白い肌にピンクの唇、睫毛は豊かでくるんくるんしてて、瞳はぱっちり――沙梨は、小柄で、見た目も中身も女の子らしくて、可愛くて、モテて。華やかで、明るくて……要は、身長が百七十センチ近くある私とは何もかもが対照的で。そんな可愛らしい彼女

が涙を零す姿は、儚げで守ってあげたくなるくらいだけど……

まるで私が泣かせているみたいな状況。しかも今は仕事中。こんな場面見つかったら、営業部の直属ドS上司から「サボってんじゃねー！」と怒号が飛びかねない。

頭の中は真っ白のまま、この部署で培った営業スマイルを見せて沙梨に返事をした。

「……いいよ。今澤さんと、仲良くね」

「結衣……本当にごめんね。ずっと友達でいてね？」

潤んだ瞳でじっと見つめられる。ぎこちなく、うん、と頷いたら、沙梨は笑顔になった。

「ありがとう、結衣！　……じゃあ、部署に戻るね！　それと資料、一緒に探してくれてありがとう！　この資料、本当は明日でもよかったんだけど、早く結衣にこのこと報告したかったから……本当にありがとう！」

「……あっ、う、うん」

パタパタと足音を立てて営業部を出ていく沙梨に手を振ることもできず、やりきれなさを感じながら席に戻ることにした。

そうか……沙梨の資料は急ぎじゃなかったのか……。それならこんな忙しい時に探さなくてもよかったのに――なんて思ったって時すでに遅し。早く戻らないと本当に叱られる。

私がずっと好きだった今澤さんは、私が所属する営業一課の先輩だ。今澤瑞樹、二十七歳。私が入社した時からずっと片思いをしていることは、沙梨も知っていたのに、まさかこんな形で失恋するとは思ってもみなかった。

自席に戻ると、営業一課の課長である湊マネージャーがイライラした様子で私の席に座っていた。

湊蒼佑、三十二歳で、私の七つ上。今澤さんと私はこの人の下で働いている。ちなみに、我が社において課長はマネージャーと呼ばれるが、営業部メンバーはみんな湊さんと呼んでいる。

すらりとした長い脚、筋肉質でいて少し細めの体。百八十センチを超える長身に、甘いマスク。ファッションに疎い私でもわかるほど、いいスーツを着ていて、いつもいい匂いがする、巷で言うイケメンの類だ。但し、笑顔は取引先でしか出ないし、基本的にいつも怒っている。一部ではモテるとも聞くけど、穏やかな人が好きな私としては、まったく惹かれるタイプではない。

「三谷！　どこにいたんだ。見積り作れ！　今週末は業務が立て込むから、依頼が来たらすぐ捌いていけって伝えてただろう！」

「すみません、すぐ作って送ります」

私の業務は、このドS上司、湊さんのアシスタントだ。湊さんが怖いのはいつものこ

となので、睨まれたり凄まれたりするのには慣れている。

そんなことより今、私は別件で傷ついているわけで。

「三谷さん……大丈夫？」

隣の席から、今澤さんが心配そうに覗き込んできた。こうして湊さんに怒られている私を、いつも気にかけてくれる。が、今はそれを嬉しいとは思えない。

「大丈夫です……」

そっけなく視線を避けて、データベースを開き、唇を噛みしめながら見積りを作った。なんか、私、バカみたい。片思いしてた時間が、バカみたい。見積り作成も、資料を探してた自分も、全部バカみたい。

泣きそうになるのを堪えて、見積りのデータを湊さんに送信した。

失恋から数日経ち、週末の夜。

ガヤガヤ、ザワザワ……

ビジネスマンたちが羽を休めるように、焼き鳥とビールを笑顔で味わっている。活気のある店内は威勢のいいスタッフの声が飛び交い、近くのテーブルではスーツ姿の人たちがジョッキをぶつけ合っている。

まったく色気のない、しかし味は絶品の焼き鳥屋。カウンター席に座る私の隣に

は……なぜか湊さん。

先日湊さんが言っていたとおり、昨日今日は忙殺の極みだった。特に昨夜は終電ギリギリまで残業して、今朝は始発で来たから寝不足でフラフラ……

お酒に強くない私が寝不足時にアルコールを入れたら、こうなるのは目に見えていたのに……

私は、ビール一杯ですっかり出来上がっていた。

「うっ……ずっと、好きだったのにっ……」

「泣くなよ、鬱陶しいな」

長い脚を組み、漆黒の目を少し細めて、酔っ払っている私に視線を向ける湊さん。繁忙期が落ち着くと、湊さんは毎回営業部のメンバーを飲みに誘って労ってくれる。

今日は残っているのが私と湊さんだけだったので、珍しく二人で行くことになったのだけれど、今週ずっと心ここにあらずだった私を、どうやら気にかけてくれていたらしい。

「今週、なんか様子がおかしいと思って誘ってみたら……」

湊さんはネクタイを緩めながら煙草を取り出し、トントンとフィルターをテーブルに叩きつけた。

この店はどこかノスタルジックな雰囲気で、ひと昔前のような空気感がある。昨今、

喫煙者の肩身は狭くなる一方だが、ここではみんな気兼ねなく喫煙していた。

私はビールが入っているジョッキを掴み、一気に飲み干した。

「どうせ、みんな沙梨みたいな子がいいんですよね。私、背も高いし、なんなら今澤さんと同じぐらいだしっ……」

「あーもう、うるせーなー。店出るぞ。外の風に当たれ」

湊さんは、取り出していた煙草をそのままケースに戻すと、支払いを済ませてくれた。

「あっ、私、払いますよ」

「バカか、恥掻かすな」

お酒飲んで、上司の前で泣いて、酔っ払って、本当に申し訳ないことで。

月曜出社したら、湊さんにすぐ謝んなきゃ……。あー、でもやけに眠いかも。ちゃんと起きておかなきゃ……

そう思って瞼を開けると――

なんかおしゃれな形の照明がつり下げられているけど……私の家は普通のシーリングライトのはず。

むくりと体を起こす。カーテンから漏れる陽光で、朝を迎えていることがわかって――

え？

ここどこ？

「やっと起きたのかよ」

開いていたドアから、バスタオルを腰に巻いた湊さんが入ってきた。その振る舞いは堂々たるもので、見ているこっちのほうが目を覆ってしまう。

「みっ、湊さん!?　なんて格好してんですかっ！」

「乳、見えてるぞ」

ぎゃあ！　私も裸!?

慌てて布団で胸元を隠し、ごっそりと抜け落ちている昨夜の記憶を手繰ろうとした。あああ、でも思い出せない。

混乱に陥りながら改めて部屋を見回してみると、ベッドは広々としたクイーンサイズ。私の部屋よりもずっと天井が高く、ベッド周りのリネンはホワイトグレー、カーテンは白。シックなブラックタイルの床の上には、無機質なアイアン家具が置かれている。シンプルながら高級感漂うインテリアに今一度息を呑んだ。もしかして、ここ、湊さんの家？

湊さんはそんな私の様子を見ながら小さく溜息をつき、ベッドに腰を下ろした。

「マジかよ。記憶ねぇの？」

「ないですね……」

「そんな漫画みたいなやつ、いるのかよ……」

「私も、ここまで記憶を失ったのは初めてで……」

湊さんは三十二歳だけれど、すごくきれいな体をしている。しなやかなその肢体を見て、私の貧相な体が恥ずかしくなった。

「ちょ、寒い。布団入れて」

「あ、ハイ……――あっ、いやっ……」

布団を開けて迎え入れると、湊さんは私の胸元に顔を近づけ、色づいた先端を口に含んだ。

「三谷は、感じやすいな」

先端を飴玉のように転がされ、顔から火が出そうだ。

湊さんがっ、あの鬼軍曹がっ、こんなこと！

「イヤイヤイヤ、ムリです！」

顔を手で覆いながら首を振ると、あっさりと手を取られて目を覗き込まれた。本当に、吸い込まれそうな漆黒の瞳。

「何がムリなんだ？　昨日はお前のほうから迫ってきたんだぞ」

嘘だーっ！

だって湊さんのこと全然タイプじゃないし、私、優しい人がいいし、エッチだって本

当にしていたら何年ぶり？　ってぐらい久々なのに……違和感も、ないし。
「あっ」
湊さんにばさりと布団を剥ぎ取られ、ささやかな胸と貧弱な体が晒された。
「……やだ、こんな体……見ないでください」
泣きそうになりながら手で肌を隠そうとしていると、湊さんが優しく私の両手を捕まえた。
シャワーを浴びたのか、湊さんの髪はしっとりと濡れて、前髪が下りている。いつも隙なくセットされているから、そんな彼の無防備さに胸がきゅんっとした。
「こんな体って、なんでそんなに卑下するんだ？」
湊さんは首を傾げながら、私の首筋を指で辿り、鎖骨に触れた。
「んッ」
「ここと、背中が好きなんだろ？」
指だけなのに、ゾクゾクと快感が走る。
「あ、湊さぁん……」
甘い声で呼んでしまって、かあっと顔が熱くなった。湊さんは「きれいな体だよ」と囁くと、私をベッドに押し倒し、両腕をシーツに縫い止めるようにして唇を重ねる。
いつもあんなに怖いのに、そんな優しい言葉を囁かれたら……

彼の冷たい唇が触れては離れる。
「三谷の唇は熱いな」
かすれた声で耳元を擽られ、唇を少し開くとちゅるりと舌が入ってきた。
「ん……ふ」
私の肩を抱くようにして、湊さんは私の舌に唾液を絡ませる。
ああ、何これ、こんなキス、知らない――
淫らな音を立てて、湊さんは私の唇から離れていく。
「昨日のこと、思い出せない？」
「は、はい……」
蕩けるようなキスの威力に、半ば理性が崩れ落ちかけている。こんなキス……知らない。
「じゃあ、おさらいしてやる」
湊さんの瞳が、獲物を捕らえる豹のように鋭く私を見据えた。
「脚、開け」
「あっ――」
両膝が割られ、湊さんの美しく長い指が、何もつけていない私の秘密へ辿りつく。指が内側に入ってきて、昨夜かなり乱れたのか……そこが相当濡れているのが、湊さんの

指の動きですぐにわかった。
「うっ、いやぁ……っ」
「そんなに嫌か？」
「あッ！」
湊さんは私の奥深くまですんなりと中指を入れ込み、胸の先端をもう一方の手でつまんだ。
「あーッ……」
どちらの指の動きもどんどん加速していく。決して強くはないのに、刺激が大きく広がり——
「あああああッ……！」
中から何かが迸り、グレーのシーツをぴしゃりと派手に濡らした。恐る恐る視線を下げると、染みが一面に散っている。
な、何これ。
こんなの、初めて出た。
「あ、すみませんっ……！　シーツ、洗いますっ……」
「よく出るよな。いいよ、替えがあるから」
よく出るよな……!?

湊さんは、きれいなアーモンドアイを少し細めて、再び混乱に陥り震える私の肩を抱き寄せる。「よく出る」とは……昨日も出したのだろうか、想像するだけで恐ろしい。
「それより、続きいいか？」
「あっ」
ねろりと首筋を唇で辿られ、声が漏れてしまう。
そんないい声で、耳元で、囁かないで。仕事中と全然違う、愛おしそうな声で。
湊さんは、ヘッドボードに置いていた薄く小さな袋を切り、私に見せつけるようにしながら灼熱に装着した。……てか、おっきいんですけど。こんなの入るの？　……もといい、入ってたの？
今、湊さんの体を見ているだけでこんなにドキドキするのに——本当に昨日、エッチしたの？
目を丸くしている私に、湊さんは口角を上げた。
「入れていい？」
「わかりませんっ」
湊さんが私の震える太ももをそっと開いて体を寄せてくる。端整な顔が近づく。
「だめ、だめですっ……湊さんと……こんなことしたら……、どんな顔して働けばいいのか……」

「何を今更……いいから力抜け。全部任せろ」
心臓がおかしくなっちゃうんじゃないかっていうほど強く鼓動を打っている。こんなにドキドキしているのは私だけみたいだ。湊さんはいつもよりセクシーさは増しているものの、平然としている。本当に昨夜、こんなことしたのだろうか。
細長い彼の指が襞を広げると、くちゃりと水音が部屋に響いた。
「広げただけなのに……すごい音だな」
「い、言わないでください……」
湊さんはふっと表情を緩めて微笑む。そして指でそっと蜜をすくい、優しく塗りつけるように小さな突起をいたぶった。たまらず体を捩ろうとすると、すぐに脚を押さえつけられる。
「気持ちいいんなら、身を任せてろ」
動きたいわけではないのに、腰が勝手に浮いてしまう。それに、いつもあんなに厳しいこの人が、こんなに優しく、こんなにセクシーだなんて……あまりに現実とかけ離れすぎていて、頭の中がパンクしそうだ。
「んっ、湊さん、も、もう……だめ……っ、いやです……」
「……悪いけど、俺は我慢できない」
押さえられていた膝が解放されたかと思うと、湊さんは体を起こして私の脚を折り曲げた。

「俺とこんなことするのは、本当に嫌か？」
「……え、っと……」
嫌、じゃ……ない、けど。
やっ、嘘、ほんとに入っちゃうの？
戸惑いながらそこを見ると、湊さんの屹立が私の蜜を纏って擦りつけられていた。時折、敏感な肉芽に湊さんの先端が当たり、体が反応する。
「三谷、力抜いて」
あ、ああ……
ダメ、ダメ……
湊さんの体重が乗っかってきて、まぬけなかっこで脚を開いて、私――!!
これだけ戸惑っていても、抗わなきゃと思っても、体がいうことを聞かない。
湊さんはゆっくりと押し開きながら私の奥へ進もうとする。
「う……あぁんっ」
「くっ……締めるなよ」
私の最奥まで辿りついた湊さんはぎりりと唇を噛み、切なげに歪んだ顔で私の体を抱き抱え、自分の上に座らせた。

「あっ、こんなカッコ……っ」
上司と対面座位って……！
繋がったままぐらりとバランスを崩しかけ、慌てて湊さんのしなやかな首に掴まった。
「ひゃあっ……」
「そうだ。そうやってしっかり抱きついとけ」
「あんっ……」
下からの突き上げに、揺さぶられる。そのたびに、湊さんのそれに奥を突かれて息が止まる。優しい律動にじわりと甘く快感が広がって、嬌声が漏れ出るのを抑えられない。
「ああ……、ダメ、湊さん……！」
ちかちかと星が回る感じがする。下腹部の熱さに身を捩ると、容赦なく突き上げられた。逃げ場をなくした私は、湊さんの見事な体に縋りつくしかなかった。
湊さんはそんな私を抱きしめ、かすれた声で呟く。
「三谷……気持ちいいんだな？　中から伝わってくる」
「むり、むりぃっ、こわれちゃう、湊さん……！」
硬い激情を締めつけた瞬間、頭の中が真っ白になり――私は彼の膝の上で達してしまった。
さっきと同じようにまた、シーツが水分を含んだ。

恥ずかしい……
恥ずかしすぎて、お嫁にいけない。
私が体育座りで落ち込んでいると、始末を済ませた湊さんが、私の頭をポンポンと撫でた。
「潮吹いて落ち込んでんのか」
そう言われると、情けなさが倍増します……
「はい……湊さんとこんな関係になってることも、です……」
「本当に覚えてねえんだな」
「え？」
「ま、いいや。とりあえず、お前俺と付き合えよ」
「は？　なんでですか？　私、今澤さんのこと好きだったんですよ？」
そう言うと、湊さんは、げんなりした顔で溜息をついた。
「俺はお前のことが好きだったんだよ。昨日散々言っただろ、バカ野郎」
……湊さんが、私のことを好き……？
嘘でしょ？
そ、そんな風に見たことなかったし、叱られてばかりだったし、湊さんが恋愛感情な

んてものを持っていたことにも驚いたし……。しかもその相手が私……

自分で言うのもなんだけど、なんで湊さんほどの人が私なんかを？

湊さんは戸惑う私の手を真剣な表情で取り、愛おしむように手の甲に口づける。その仕草は実に麗しくて、不本意ながら見とれてしまった。

「今澤ごとき忘れさせてやるよ」

……湊さんじゃないみたい。

いつもの鬼はどこに行ったのか。こんな美しい男性に、こんなに熱意をもって言われたら（但し性格に難ありだけど）、圧倒されてしまう。

……って、簡単すぎでしょ私！　相手はあの湊さん！　今澤さんへの想いも消えたわけじゃないし……

「そんな……か、簡単に忘れられるかどうか……」

「俺は気にしない」

「で、でも、私と湊さんが付き合ったら、仕事がやりづらくないですか？」

「大丈夫だよ。守ってやるから」

きゅん。

……あ、なにこれ。

私、湊さんにときめいてる？

「――三谷」

甘いバリトンの美声が耳を支配したかと思うと、私はまたシーツの上で、湊さんの体を受け止めていた。

逞しい肩に手を伸ばし、キスの雨を受ける。煙草の苦みまでも幸せに感じる。

こんなハイスペックな男の人に愛されたことなんて、今まで一度もない。

「三谷……返事は？」

「……っ……あ」

胸の先端を湊さんの舌で掠められ、びくんと体が震える。軽く吸い上げられ、体の奥が熱くなった。もう一方の乳房もやわやわと揉まれる。

「……っ」

「嫌じゃないなら……気持ちいいのなら……我慢するな」

甘く響く声が、拙い思考を奪う。色づいた先端を指でするりするりと刺激され、呼応するように下腹部がうねり出す。

「だ、だめ……みなと、さん……」

何がだめなのか自分でもわからない。湊さんの手がそろそろと下りてきて、肉襞に辿りついた。

「ひ、ぃっ……」

湊さんの指が秘裂を広げる。それだけで私がどのくらい発情していたかわかる。そこはすっかり濡れそぼり、触られる前からとろりと蜜を滴らせていた。

「はは。濡れすぎだな」

湊さんは微笑みながら、中指でそっとクリトリスに触れる。

「す、すみませ……っ、ああっんっ……」

「謝ることじゃない。そう、もっと声出していいから――」

ぬるぬると弧を描くように湊さんの指が滑る。止めどない快感を逃がすのに私は必死になった。

これまでの数少ない経験の中で、エクスタシーを感じたことはない。こんなに淫らな体液を漏らしたこともない。でも、湊さんにクリトリスを弄られていると、本当に何かがおなかの奥から溢れそうな感じがするのだ。

「で、出ちゃうから、やめてくださ……」

「いいよ。出して」

「そ、そんな……無理ですっ」

「無理なのか？　ははっ、どっちなんだよ」

小さく笑う湊さんに、あっという間に膝で脚を割り開かれる。

「三谷。……挿れていい？」

職場にいるような堂々とした口調だけど、どこか不安げな眼差しに胸が締め付けられる。

「あっ……」

湊さんの唇が首筋を滑り、耳たぶに吐息がかかる。夢のような甘さに耐えられなくて顔を背けても、逃がしてはくれない。

「……俺の彼女になるのは嫌か？」

濃厚なキスの合間に、湊さんと視線が交わる。彼が切なく動きながら、悩ましい瞳で私を求めてくる。

答えを急かすような優しいキスが何度も降ってくる。

ず、ずるい。こんな……

だって、私、失恋したばかりで……そんなにすぐ、気持ちを切り替えられるかわからない。そんな状態で付き合ったら、湊さんを傷つけることになるんじゃないの？

「湊さんのことが嫌ってわけじゃなくて……こんな……今澤さんがだめだったからすぐ乗り換えるみたいな状態が……んっ」

わずかな理性で最後の抵抗を試みるが、唇の隙間から湊さんの唇が押し入ってきて、言葉にならない。

「……すぐに無理して忘れなくていい。利用してくれて構わない。俺を選んでくれたら、

後悔はさせないから――」

失恋の傷も、友人の心ない行為も、湊さんの何もかも包んでくれるような温かさが癒してくれるみたいだ。この人といたら、今澤さんのことを忘れられるかもしれない。

「三谷……返事は？」

優しい声に、胸の奥がぎゅっと締めつけられる。困惑や不甲斐なさで心の中がごちゃ混ぜになりながらも、湊さんの想いに胸打たれている自分が確かにいる。

目の前にいるこの人を受け入れたい、と思った。

「私でよければ、よろしくお願いします……」

なんて、簡単な女だ。

自分でもそう思うけれど、湊さんのこの迫力と妖艶さには、つい服従してしまう。

「……もう、挿れる」

硬く反り返った熱杭が、クリトリスと襞を滑った。とろとろの透明な蜜を纏って、険しい表情をした湊さんの体重が乗ってくる。私は目を瞑ってこくこくと頷いた。

奥のほうまで入ってきた湊さんで、私の中が目いっぱい広げられる。

「……あっ、あぁ……っ、ん」

苦しい。だけど気持ちよくて、なぜか涙が出そうなくらい胸がいっぱいで。

湊さんは、心配そうな瞳で私を見下ろしながら、緩やかに動く。私の反応をじっくり

と確かめ、慈しむようなキスを唇に、体中に、何度も何度も落としてくれる。

「み……みなと……さ」

あまりにも甘く、深い快感から逃れるように名前を呼ぶと、彼はぽつりと呟いた。

「……夢みたいだ」

本当に幸せそうに言うから、目頭が熱くなって、湊さんの首に手を回してしがみ付いた。

深く深く繋がり、湊さんの怒張に奥をぐりぐりと刺激される。

たまらなくなったその瞬間、湊さんの動きが速まった。

「ひっ、ん、みなと、さんっ」

「悪い、もう、限界」

「私もっ……もう……っ」

絶頂に向かうように激しく揺らされる。愛液が飛び散り、淫らな水音が鳴り響いた。

「くっ……」

湊さんが眉根を寄せ、精を吐き出すと、私の奥が更に絞り出させるようにきつく収縮し、ひくひくと痙攣した。

こんな私でもいいのかな。

本当に、今澤さんのこと、忘れられるかな。

「湊さん。こんな中途半端な私でも……いいんですか」
二度目の絶頂を迎えたあと湊さんに尋ねてみると、「そのままのお前でいいよ」と頬にキスをされた。
失恋から一転。鬼上司が私の彼氏になった。

そして、月曜日――
私のデスクに、先ほど必死で作った資料が飛んできた。彼氏になったはずのイケメン鬼上司が、まさに鬼のような顔をして凄んでくる。
「要領悪りーんだよ！　今まで何聞いてたんだ！　やり直せ！」
やはり、鬼が降臨していました――
鬼度三割増し。
「はい……やり直します……」
結局、土曜も日曜も湊さんちにお泊まりした。彼氏になった湊さんは本当に優しくて、甘くて……。ここはカフェか何かかと勘違いしそうなほどのステキな朝食を作ってくれたり、私が泊まりに来る日のためにと言って買い出しに行って、いろいろと買ってくれたり。どこへ行くにも手を繋ぎ、家にいる時はずっとくっついて、目が合うとキスを交わし、そうするとまたいちゃいちゃが始まる。

エンドレス溺愛で、身も心も蕩けさせられた週末だった。だからといって仕事でもこのぐらい優しくしてほしいなどとは思っていないが……二日間甘々で過ごした上でのこのギャップは恐ろしい。
元々、このぐらい怒ってたっけな。
つまり、こっちが本物の湊さん？
はああ……
溜息をついてパソコンに向かっていると、今澤さんがコーヒーを置いてくれた。
「あ、ありがとうございます」
ちょうど飲み物を買いに行こうと思っていたところだったので、ありがたくいただく。
「お金払います」
「いいよ。僕からの差し入れだから」
「そんな……」
今澤さんは百七十センチちょっとの身長で、くせのないすっきりとした顔だち。髪は少し柔らかくて茶色がかっていて、瞳も色素が薄い感じだ。最初はハーフなのかと思っていた。
「そのデータ、僕も見させてもらったよ。よくできてると思うけど、湊さんは完璧主義だからね……」

「いえ……これも修業ですから」
そう答えると、今澤さんは優しげに目を細めて、
「できることがあれば手伝うから、遠慮なく言ってね」
と言い、自分の業務に手をつけ始めた。
このさりげない優しさが、本当に好きだった。
熱いコーヒーをふうふう冷ましながら飲んでいると、今澤さんが遠くを見ていることに気がついた。その視線を追ったら、……沙梨が、他部署の男性と話している。
再びちらりと今澤さんの横顔を見ると、悲しそうな、複雑そうな顔をしていて。
今澤さんは、本当に沙梨に夢中なんだなぁと痛感した。私の入る隙なんてきっと最初からなかったのだ。
そんなことを思いながらコーヒーをデスクに置き、首を大きく回して仕事に取りかかった。

「三谷、まだいたのか」
会議で抜けていた湊さんがデスクに帰ってきた。もう午後九時前だ。働き方改革により、役員の事前許可がない限り九時には退勤しないといけない。
気がつけば、他のメンバーはほぼ退勤しているようだった。今澤さんも、デスクに

バッグは置いてあるけれど姿は見えない。どこかで打ち合わせかな。
「はい、あとちょっとで終わります」
「早くしろ。無許可での残業は禁止だ」
「……」
本当に、昨日とは別人みたい……
私の隣――今澤さんの椅子にふてぶてしく座る湊さんをじっと見ると、「あ？」と凄(すご)まれた。恐ろしい。
「……休みの日と全然違いますね」
「そりゃそうだろ。こんなところでケツでも触れっつーのかよ」
「ケツ！　セクハラ！」
「お前、声でけえ」
口が悪すぎるし意地悪な笑い方だけど、笑った！　会社で！
「湊さん、やっと笑った」
そう言うと、湊さんは少しむっとしたような顔をしつつ、デスクの下で私の手を握った。
オフィスには他に誰もいないのだけど、誰かに見つかったら――今澤さんが戻ってきたら、とひやひやした。

でも、湊さんの手はすごく温かくて、ほっとして、同時にドキドキする。
「今日もうちに来い。俺はもう少し残るから。勝手に入っといて」
湊さんはスーツのポケットからキーを出し、私の膝の上に置いた。チャリ、と音がするのと同時に、オフィスのドアが開く。
「あ、湊さん、戻られてたんですね」
今澤さんが慌ただしげに湊さんに近寄り、今進めている案件の話を始めた。
湊さんの淡白な返答にもめげずに、今澤さんは一生懸命進捗を伝えている。
私は、湊さんの家のキーをそっとポケットに入れ、白熱する二人を横目に、先にオフィスを出た。
湊さんの家は、ここから歩いていける距離にある。タクシーを使うか、どうするか……
晩ごはんはどうしよう……
「――あ、結衣！」
考えながらビルの前のロータリーを歩いていたら、沙梨が手を振ってきた。
「あれっ、沙梨遅いね！　残業だったの？」
沙梨は人事部人材育成課にいる。残業の多い営業部と違って、今の時期は基本的に定時で上がれるはず……。あ、今澤さんと待ち合わせか。

「今澤さんは、まだ湊さんと話してるよ」
「あっ、そうなんだ？　湊マネージャーってかっこいいよねぇ」
かっこいい……？
甘い声を出す沙梨に、「お、おう」と答える。
アンタには今澤さんがいるでしょっ、と言えない、ヘタレの私。
それに、それに、湊さんは今、私の彼氏、なんだから――
この間まで、今澤さんのことが好きだったのに……湊さんに対して独占欲が芽生えている自分に驚く。
「湊マネージャー、人事部でも人気あるよ～。結衣の代わりにアシスタントになりたいって言ってる子、結構いるもん」
「へ～……。毎日罵声を浴びたいのかな……」
「あの厳しさがいいんじゃない」
「へえ……」
ノリについていけなくなってきたところで、沙梨が私の背後を見た。
振り返ると、遠くからでもわかるスタイルの良さとイケメン臭。
私の鬼上司が険しい表情で立っていた。
「湊マネージャー！　お疲れさまですッ」

「ああ。お疲れさま」
湊さんは普段どおりの淡白な対応だが、沙梨の目はハートになっている。
「三谷はまだ帰ってなかったのか」
「はい……」
苦笑いしながらちらりと湊さんを見ると、彼はビルのエントランスを振り返って言った。
「今澤なら、もう出てくると思うよ。お疲れさま。三谷、帰るぞ」
湊さんが私の背中をぽんと叩き、「行くぞ」と言う。
「……あ、はいっ。沙梨、ばいばいっ」
「え……あ、うん、お疲れ！」
沙梨を残し、先を行く湊さんを走るようにして追いかける。湊さんは脚が長いし、歩くの速いし、全然立ち止まってくれないから息が切れてくる。
「み、湊さんっ……」
曲がり角を曲がったら、ようやく立ち止まってくれた。
はあはあと呼吸を荒くする私を、息をのむほど怖い顔をした湊さんが見下ろしてくる。
「え、なんですか……」
怒られる？　と身構えたら、大きな手でぎゅっと抱きしめてくれた。

「ど、どうしたんですか？」
「……いや。別に……」
あんなに怖い顔で優しく抱きしめるなんて反則っ…！
ドキドキを隠しながら、湊さんの胸の中でまったく関係のない質問を繰り出す。
「ご飯はどうしますか？」
私がカレーしか作れないことを、湊さんはご存じである。私が料理が苦手だという話は、営業部での鉄板のイジられネタだった。
「……お前は何食いたいんだ」
「焼き鳥……かな？」
湊さんは苦笑し、「じゃあ、行くか」と指と指を絡ませるようにして手を繋ぐ。不覚にもドキッとした。
こんな繋ぎ方をこの人とするなんて、少し前は考えられなかった。
「それにしても、焼き鳥好きだな。色気も何もねえ店なのに」
「それがいいんですよー。あったかくて」
自然体でいさせてくれるあのお店は、湊さんに教えてもらった。
私がたくさんお酒を呑める体質ならもっと楽しいんだろうけれど。
のれんをくぐって、カウンター席に座って注文をし、レモンサワーとビールで乾杯す

る。前回来た時は、まさか付き合うことになるなんて思ってもいなかったのに。不思議な巡り合わせに感謝していたその時――

「結衣ー！」

背後から聞き慣れた甘いソプラノボイスが響き、次いでポンと肩が叩かれた。

「……さ、沙梨」

いつものとおり、完璧に可愛らしく微笑む沙梨と……そして、その後ろには今澤さん――

「お二人の姿が見えたので、ご一緒したいなと思って」

沙梨は、小首を傾げ、私と湊さんを見てにっこり。

今までこの手の提案を断られたことがないのだろう。沙梨は返事を待たず、湊さんの横の椅子にちょこんとバッグを置いた。逆に、今澤さんが「お邪魔じゃないかな」と気を遣っている。

私は複雑な思いを抱きながらちらりと湊さんの顔を見たが、ポーカーフェイスでどう感じているのかわからない。

「……四人ならテーブル席でいいんじゃねぇの。あっち空いてるし」

「わー！　うれしーい！　じゃあ、結衣、隣に座ろ？」

「う、うん」

急展開に戸惑いながら、店員さんに声をかけて、年季の入ったテーブル席に移動させてもらった。

壁際の席で、奥に湊さんと今澤さんが座り、湊さんの向かいに沙梨が、今澤さんの向かいに私が座る形になった。

沙梨はしきりに湊さんに話しかけている。そんなに実のある内容ではないが、話がまったく途切れない。今澤さんと私は所在なげになんとなく笑い合った。

ほら、沙梨。湊さんにばっかり話しかけてるから、今澤さん困ってるよー！

「お待ちどおさまー」

届いた串を手に取ってかぶりつく。焼きたての香ばしさと脂の乗った香りが鼻腔をくすぐる。やっぱりここの焼き鳥は最高。具材が大きめなのもいいところだ。お腹も空いていたのでどんどん食べ進めていたら、沙梨が箸を使って串から肉を外し始めた。

「お前、それ取ったらありがたみねえだろ。そのまま食えよ」

湊さんが苦笑しながら沙梨に言う。

「えーっ。だって、喉の奥突きそうなんですもん。食べづらいし危ないかなって」

「三谷見てみろよ。このぐらい豪快に行けよ」

湊さんが私を指したせいで、大口を開けて串の横からワイルドに食らいついている私にみんなが一斉に注目する。

今澤さんも私を見てる……

「ちょっと、湊さん！　そんなこと褒められても嬉しくないですよ！」

反論すると、今澤さんと沙梨が笑った。

「ところで、湊マネージャーって、結衣とよく飲みに行くんですか？」

沙梨が湊さんにきらきらした瞳を向けて尋ねる。

「ま、直属だし、たまにはな」

あ……湊さん、隠した。もしかして、私が今澤さんのこと好きだって言ってたから、すぐに湊さんと付き合うの、外聞が悪いと思ってくれたのかな。

いかにも湊さんらしい気遣いに心の中で感謝しながら、レモンサワーのグラスに口をつける。

「それより、お前ら二人はどうなんだ。あんまり目立つようなことはやめてくれよ。周りが気を遣うんだからな」

湊さんの言葉に、今澤さんが小さくなる。自身の恋愛事情は隠しておいて、沙梨たちには釘を刺すあたり、なかなかの図太さだと思う。

その後は、それぞれの業務や共通の同僚の話題など、当たり障りのない会話をしてお開きとなった。

気がつくと、沙梨の足元が怪しいことになっている。

すっかり酔っ払って、この前の私と変わらないんじゃ……

「――大丈夫？　沙梨」

「ちょっとハイペースだったからね」

今澤さんが沙梨の腰を支えて、タクシーを拾おうとしている。

その触れ方を見て、二人は深い仲なのだということを痛感した。

「じゃあ、今澤。秋本をよろしくな」

湊さんはあっさりしたもので、今澤さんに沙梨を託すと、「三谷」と私を呼ぶ。

今澤さん、一人で送るのは大変だと思うけど、いいのかな……

少し気になったけれど、湊さんの目が怒っているような気がしたので、迷いを振り切る。

「今澤さん、また明日！」

二人にぺこりと礼をして、湊さんのもとへ走った。

「とんだ邪魔が入ったな」

湊さんが小声で言いながら舌打ちをした。悪い顔にすっかり豹変……。そんな横顔を見て、思わず笑う。

「……何見てんだよ」

湊さんは、悪い顔のまま私を睨む。精悍（せいかん）で端整な顔で凄（すご）まれると、やはり迫力があっ

て、う……と一歩下がった。
「見てませんよ……」
思いっきり見ていたくせに、嘘をつく私。
沙梨の世話を焼く今澤さんの姿には、やっぱり二人は付き合っているんだなと実感させられたけど……そのことよりも、湊さんまで沙梨の可愛らしさに惹かれてたら寂しいな、なんて感情が湧いてくる。
「元気ねえな。疲れたか？」
ぐしゃりと頭を撫でられ、道端で抱き寄せられた。もうすぐ日付が変わりそうな時刻。あたりに人の姿はないけれど、こんなところでいちゃいちゃするのは気が引ける。
「こっち向けよ」
「そういえば湊さん……私のこと、食いしん坊扱いしてましたよね」
「ちまちま食う女よりいいだろ」
そ、そう？　笑いものにされた気がしていたのだけれど。あれはいい意味だった？
「それより、お前も今澤と見つめ合って笑ってただろ」
「それは――」
言い訳をしようとしたのに、湊さんの熱い口づけが答えさせてくれなかった。
「ん……んふっ……み、湊さん……」

息ができない。
奥へ、奥へと湊さんが進み、口内が湊さんで満たされて、立っていられない。湊さんは私の腰を引き寄せて、ねっとりと味わうようにキスしていて。
湊さんに嫉妬されているのが嬉しくて、何もかも捧げたくなる。
「――お前な。俺以外の男に、可愛い顔見せるんじゃねえよ」
「……えっ……」
「今日は寝かさねえからな。妬かせやがって」
耳元で言ったかと思うと、突然腕をぱっと離し、湊さんは歩き出す。
「……ま、待ってくださいっ」
ぱたぱたと追いかけると、湊さんは怒った顔をしつつも私の指に長く美しい指を絡ませた。
湊さん……
私……今澤さんのこと、本当に忘れられるかもしれない。
湊さんのマンションに着くと、何度か愛し合ったベッドに連れていかれて剥かれるように服を脱がされた。
湊さんのジャケットが雑に置かれるのを、ベッドに横たわりながら見る。
「やっぱり今澤が気になる？」

しゅるしゅると外したネクタイをジャケットの上に放り、ベッドを軋ませて湊さんが私の上に覆いかぶさる。

「……気になるというか……もう、沙梨の彼氏、ですし」

「気になってんじゃねえか。あー、イラつく……」

「あッ」

ブラジャーを両手でぐいと上げると、湊さんは現れた小さな果実にすぐに口をつける。そして舌でれろりと転がし、私の表情を確かめた。

「こんなこと、今澤にさせんなよ」

「させませんよっ、ていうか、そんな仲になりませんっ」

「……そうかな」

「え？　――あッ」

湊さんの手が、私の下腹部を包む薄いブルーの布の中に忍び込み、擽るように動く。

「あっ、やっ、くすぐったいですっ……」

お尻を振って逃れようとしたら、勢いよく下着を引き下ろされた。そして、片脚を強い力で高く高く上げさせられる。湊さんの眼前に晒された女の部分を急いで片手で隠す。私が慌てている様子を見て、湊さんは意地悪く口角を上げた。

「こういうの好きだろ。大人しく任せろ。優しくしてやるから」

ああ……

見事なツンデレだなあ。

今日は会社であんなに怒ってたのに。

湊さんの指で左右に秘密が開かれる。蜜が溢れた花びらに彼の吐息がかかると、目いっぱい広げられている状況を嫌でも自覚してしまう。暴かれた花蕾を見つめる湊さんに、たまらず懇願した。

「やっ……、そんなところ、じっと見ないでください……」

「ああ。見られるだけじゃ物足りないよな？」

「ちがいます……っ、そんな意味じゃなくて、あっ」

震える肉芽にキスされ、体中に電流が走ったような衝撃を感じてのけ反った。

「あぁんっ、あぁ」

優しく、濃厚に舐められて。

この先、湊さんなしじゃいられないんじゃないかと思うぐらい、その舌は優しく愛撫を施してくる。小粒なしこりがねっとりと舌で包まれ、時にはれろれろとさすられ、その刺激で私の膝が痙攣する。快感に体を捩っても、膝ががくがく震えても、湊さんは放そうとせず、陰核にじっくりと濃厚なキスを続ける。

体の奥のほうに悦楽の熱が溜まる。あられもない声を上げて、髪を振り乱したいのに、

快楽が強すぎてただ耐えることしかできない。気がつけば透明な愛液が太ももを伝って、シーツまで濡らしていた。

「き、キモチいいですッ、湊さん……」

「……そうか。俺も興奮してる」

ようやく脚を放してくれた。そして湊さんはすべてを脱ぎ捨て、そそり立った自身の熱杭を上下に扱き始めた。自分の屹立を扱く姿に驚いたが、あまりにも艶っぽくて見惚れてしまう。

こんな極上の男の、こんな姿――

「止まらねえな。結衣のここは……。どんどん垂れてくる」

湊さんは熱杭を握りながら私の襞に手を伸ばした。先ほどの愛撫により蜜が溢れているのは一目瞭然だ。湊さんの中指がするりと肉襞を掻き分けて入ってくる。

少し掻き回されただけでちゅぷりと卑猥な音がして、恥ずかしくてたまらなかった。

「すごいな……どうなってんの。そんなに弄られるの気持ちいいのか？」

「ん、んーっ！」

軽く掻き回され、花蕾を指先で弾かれる。ビクンと体が跳ねてさらにシーツを濡らした。

いよいよ湊さんは上体を起こし、ヘッドボードから出した小さなパックを開け、自分

の男に極薄の隔たりをあてがった。

湊さんの視線が私の瞳を貫く。次の瞬間、大きく広げられた私の秘部に湊さんの怒張が押し入ってきた。たっぷりの蜜で潤っているはずなのに、圧迫感がすごい。みちみちと中を掻き分け、ゆっくりと奥まで到達した時、たまらずのけ反ってしまった。奥に当たって少し苦しい。

湊さんの律動に合わせて、私の中が蠢く。視線を交えたまま、お互いの体が大きく揺れる。

時折熱く滾った屹立が私の奥をぐりぐりと擦る。

「あっ、湊さんっ……そこ……」

「いいんだろ。知ってるよ。お前の体は全部」

「いや……」

耳元で囁かれ、耳たぶを甘く噛まれた。快感が体中に充満して、びくりと震える。湊さんの唇が首筋を辿り、乳房の先端に口づけられる。

「は……ぁ」

愛しさで胸がいっぱいになり、乳房に愛撫している湊さんを抱きしめた。

「……気持ちいいんだな」

湊さんはそう言うと、満足げに微笑み、私の脚を捕まえた。

「やっ、いやですー！」
足先にキスをされる。嫌がっても放してくれず、慈しむように舐め尽くされる。湊さんは脚フェチなんだろうか、恥ずかしすぎてたまらない。
「湊さんっ……」
「きれいな脚だな」
「っ……」
脚が自由になったかと思うと、再び湊さんの律動で体が揺れる。甘いキスを落とされながら、胸の先を親指と人差し指できゅうっとつままれた。
「っ！」
ビクンと体を震わせた私の首筋を、湊さんが甘噛みする。獲物をしとめた肉食動物のように。そして、低い声で囁いた。
「結衣。……名前で呼んで」
「えっ……名前……？」
「そうだよ。いつまで名字で呼ぶつもりだ？　お前が俺の名前を知らないはずないだろ？」
それはそうだけど……
荒い息の中、私は小さく答えた。

「そ、蒼佑さん……？」
すると、湊さんはぐっと唇を噛みしめ、私の腰を掴んだ。そしてスイッチが入ったかのように荒々しく私に覆いかぶさる。
「……クソっ、結衣、もう無理だっ……」
「あああああっ、蒼佑さん……っ！」
強く抱きしめられながら、ベッドを大きく軋ませて奥を求められる。興奮しきった怒張で甘く激しく突き上げられ、中がぎゅうと締まった。薄い膜の中で彼の白濁が暴発する。
湊さんが、肩で息をしながら私を抱きしめる。
「好きだ」
髪に、鎖骨にもキスが降ってくる。愛しさが溢れそうになって抱きしめ返した。
私も湊さんが……好きだ。
そうして、どちらからともなく見つめ合う。
「蒼佑さんって呼ぶの、照れますね」
すると、湊さんは少し照れたように頭を掻いた。あの湊さんが照れるなんて……
「ずっとそう呼んで。……俺は結衣の彼氏なんだから」
「ふふ。はい……」

「結衣」
後ろから抱きしめられ――やわやわと両胸に触られ、その先端を指で転がされ始める。
敏感になりすぎた体は、簡単に反応する。
「あっ、やめてください……」
力が入らない……
少しだけ開かれている膝の間に手が滑り込んできて、先ほどまで彼の勃起を収めていた小さな蜜口に指がめり込んでいく。掻き回され、くちゅくちゅと音がした。
「み、湊さん……」
「蒼佑、だろ」
「ふああっ……」
ぬるついて柔らかくなっている肉の中を、湊さんの指が蠢く。
「脚、開いてろ」
「はい……」
自分の膝を自らの手で支えて、震えながら秘密を開帳した。
さっきのセックスの名残りの蜜が纏わりついているはずだ。湊さんは顔を寄せ、至近距離でそこを観察する。
「舐めてやる」

湊さんが、滴り落ちるとろりとした蜜を、まるで甘露を味わうかのように舐める。皮を剥かれ、現れたぷくりとした蕾を大切そうに舌で転がし――
もう、もう――
「あっ、い、いっちゃう……っ」
唇を噛みしめながら湊さんの眼前で絶頂に達すると、彼は色香を漂わせ、満足げに微笑んだ。

SIDE　湊蒼佑

「湊さんっ……私、三年も好きだったんですよっ……！　沙梨もそのこと知ってたくせに、ひどくないですか……！」
直属の部下である三谷結衣が、人目も気にせず、俺――湊蒼佑の目の前で泣き喚いた時、正直チャンスだと思わなかったと言ったら嘘になる。
泣いている三谷には悪いが、ずっとこいつのことを好きだった俺からすれば、天が与えてくれた幸運のようにも思えた。
しかし、いくらここが騒がしい店だとはいえ、少しは周りを気にしないものか。

ほら、隣のサラリーマン二人組も、何事かとこちらを見ている。
こいつが、普段はあまり感情的な振る舞いをしないほうだというのは知っている。
なのに、今澤に女ができただけで、こんなに泣くとは……
柔和な性格の今澤。仕事はまあまあ優秀だが、あまり冒険心はないやつだ。ああいうのがタイプだったとはな。近くにいたけど、三谷が今澤を好きだとはまったく気づかなかった。
「泣くなよ、鬱陶しいな」
「どうせ、みんな沙梨みたいな子がいいんですよね。私、背も高いし、なんなら今澤さんと同じぐらいだしっ……」
自慢じゃないがわりと厚顔であるはずのこの俺が、いよいよ周りの目に耐えられなくなり、店を出たのが終電真近。
「おい。しっかり歩け」
「ぐすっ……」
酔っ払い女は、しなだれかかるように俺に身を預けていた。
こいつは、失恋して、今ドン底なのかもしれないが、俺にとっては――
「湊さん……」
「一人で帰れるか」

立ち読みサンプル
はここまで

「帰りませんよっ！」
「じゃあどうすんだ」
「湊さん、朝まで付き合ってくださいよ」
「そんな若くねえわ」
どんどんタチが悪くなっていく三谷を抱えるようにして歩く。すると、目が覚めるような派手派手しいネオンカラーが瞬いているホテルの前で三谷がいきなり足を止めた。
「湊さん、入りましょうよっ」
カフェかなにかに誘うノリで、男をラブホテルに誘う三谷に絶句する。
「はあ？　入って何すんだよ」
「何って、セックスに決まってるじゃないですか！　……むぐっ」
「声量下げろ。うるせーんだよ！」
なんだ、コイツは。
やる気なのか、この野郎。
俺がずっとお前のことを好きだったのを知っていて、試しているのか？
仕事では信頼関係を築けている実感はあったが、男としては意識されていなかったはずだ。そんな状況での「セックスに決まってる」発言に眩暈がした。
三谷は、俺が昇進試験に受かり、念願のマネージャーになった年に入社し、俺の初め